

来週の「売り物」記事はこれ



2014年11月7日号

毎日新聞東京本社 編集局・販促宣伝部

日本を捨て異国に終(つい)の地を求めて

無頼派、レイテに死す

9日(日)



今年1月、フィリピン・レイテ島中部の町パロで一人の日本人男性(75)が命を絶ちました。男性がフィリピンで暮らすようになったのは16年前のこと。それまで東京でマージャン店を経営し、その裏では経済事件に介入する「事件屋稼業」に手を染めていました。そして、還暦を前に心機一転をはかり、安住の地をフィリピンに求めたはずでした。けれど



ども一昨年11月、7300人以上が犠牲となった台風30号で自宅をはじめ全財産を失いました。被災後、帰国のすすめもかたくなに拒みつづけ、「おれはフィリピンで死ぬ」と口にしていました。遺書には「ありがとう、今でも幸せだ」と書かれていました。いったい何を言い残したかったのか——。男性の軌跡をたどると、人知れず日比の交流に努めようとした「別の顔」が浮かび上がってきたのです。

日曜朝は『S』で始まる——。ストーリーにご期待ください。

九州電力川内原発の再稼働に地元自治体が同意

反対の声を押し切ってまで進めるワケは？

夕刊2面特集ワイド 10日(月)



鹿児島県の伊藤祐一郎知事は7日、川内原発=写真=再稼働への同意を表明しました。再稼働に同意が必要なのは立地市町村と県とされており、立地する薩摩川内市も既に同意していますので、再稼働への地元同意が満たされた形です。しかし、全ての住民が納得しているわけではありません。例えば、市全域が原発30キロ圏内のいちき串木野市では、人口の過半数にあたる1万5464人分の反対署名が市に出されていました。それでもなぜ、県は再稼働に同意したのでしょうか。背景を探ります。

1964東京から2020TOKYOへ

第2部 「パラリンピックのはじまり」

11日(火)から5回

1964年11月8日、東京・代々木公園陸上競技場で東京パラリンピックが開幕してから50周年を迎えました。この大会で初めて命名された「パラリンピック」。日本選手団は51人で、金メダルはわずかに1個でしたが、国内の障害者スポーツが認知される大きな契機となりました。大会が国内の障害者に何をもたらし何を残したのか、当時の模様も織り込みながら描きます。また、50周年当日の8日には、水泳やバスケットボールなどに出場した大分県別府市在住の須崎勝己さんのインタビューを掲載します。



エボラ出血熱の基礎知識を紹介

感染拡大の現状、日本で患者が発生した場合の対応は

13日（木）朝刊



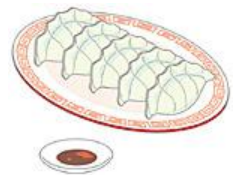
エボラ出血熱の流行が西アフリカで続いています。過去最悪の患者数、死者数となり、日本でも患者が発生する可能性は否定できません。13日（木）と20日（木）の「くらしナビ 医療・健康」のページで、今回の流行拡大の見通しや感染経路についてビジュアルに解説するとともに、国内で患者が発生した場合の政府の対応、一般市民の心構えについて分かりやすく紹介します。

「西原理恵子のおかん飯」 おんなのしんぶん面9日（日）

おんなの
しんぶん



漫画家の西原理恵子さんが、料理家の枝元なほみさんに料理の手ほどきを受ける人気コーナー。今週は「レタスギョーザ」です。「同じ値段で2倍重いキャベツが買えるから、レタスは買わない」と言っただけで西原さんをうならせた一品です。毎日新聞ニュースサイトにアップされている動画もぜひ、ご覧ください。



首元をおしゃれに防寒 くらしナビ面8日（土）

朝晩の冷え込みが厳しくなってきました。防寒には首回りの保温が大切ですが、最近は定番のマフラーだけでなく、おしゃれで機能的な物が増えてきました。表と裏で色柄が違い、リバーシブルで使える大判のストール、腕を通せる穴があり、ジャケットやコート代わりになる羽織ものなど、今年らしいアイテムを紹介します。

年かさね いま～それぞれの食卓

くらしナビ面11日（火）から4回

核家族化、高齢化の進展で、高齢者の1人暮らしや高齢夫婦の世帯が増えていきます。在宅で暮らし続けるためには、規則正しい、バランスの取れた食生活が欠かせませんが、買い物さえままならず、自分で食事をまかなうことが難しい場合も少なくありません。農村から都市部まで高齢者を訪ね、「食卓」事情の今を探ります。

